

昭和五十年六月招集

第二回館山市議定会定例会會議録第三号

館山市議會

目次

日時	一
場所	一
出席議員	一
欠席議員	一
出席説明員	一
出席事務局職員	一
議事日程	一
開議	二
報告第一号	二
報告第二号	一一
報告第三号	一五
議案第四十七号	一六
議案第四十八号	一六
議案第四十九号	一六
議案第五十号	一九
議案第五十一号	二五
発言の取り消し	三〇
議案第五十二号	三三
議案第五十三号	三四
日程の追加	三五
議案第五十四号	三五
閉会	三六
本日の会議に付した事件	三六

一、昭和五十年七月四日（金曜日）午前十時

一、館山市役所議場

一、出席議員 三十名

一番	吉田 勇治郎	二番	伊藤 幸太郎
三番	穴戸 寿夫	四番	押元 稔
五番	黒川 平治	六番	鈴木 正義
七番	本間 昭二	八番	松下 正己
九番	鈴木 稔	〇番	流山 源次郎
一番	近藤 好雄	二番	栗原 一雄
三番	林 豊	四番	石井 輝久
五番	辻田 実	六番	安西 益男
七番	石井 武敏	八番	渡辺 軍治郎
九番	渡辺 昭夫	二〇番	和田 一郎
二一番	田中 禄郎	二二番	五十嵐 昇
二三番	菊井 敏博	二四番	西村 真次
二五番	伊賀 多朗	二六番	藤田 益治
二七番	速山 ヨネ子	二八番	石井 正
二九番	望月 照正	三〇番	山口 康

一、欠席議員 なし

一、出席説明員

第一日目に同じ

一、出席事務局職員

第一日目に同じ

一、議事日程（第三号）

昭和五十年七月四日午前十時開議

日程第一 報告第一 一号

財団法人館山市開発公社の経営状況説明書の提出について

日程第二 報告第二 二号

財団法人館山市環境保全公社の経営状況説明書の提出について

日程第三 報告第三 三号

繰越明許費繰越計算書の報告について

日程第四 議案第四十七号

館山市市税条例の一部を改正する条例の制定について

日程第五 議案第四十八号

館山市非常勤消防団員に係る退職報償金の支給に関する条例の一部を改正する条例の制定について

日程第六 議案第四十九号

館山市民センター条例の一部を改正する条例の制定について

日程第七 議案第五十号

館山市国民健康保険税条例の一部を改正する条例の制定について

日程第八 議案第五十一号

館山市廃棄物の処理及び清掃に関する条例の一部を改正する条例の制定について

日程第九 議案第五十二号

昭和五十年年度館山市一般会計補正予算(第二号)

日程第十 議案第五十三号

昭和五十年年度館山市国民宿舎特別会計補正予算(第一号)

開

議 午前十時二分開議

きます。

本日の会議はお手もとに配付の日程表により行ないます。

本日の議事案件の内容説明はすべて終っております。直ちに質疑より行ないます。

議案の上程

○議長(吉田勇治郎君) 日程第一、報告第一号財団法人館山市開発公社の経営状況説明書の提出についてを議題といたします。

報告第一号 財団法人館山市開発公社の経営状況説明書の提出について

について

質疑応答

○議長(吉田勇治郎君) 御質疑を願います。

〇一八番(渡辺軍治郎君) 第三ページの受託事業の第二項ですが、これは館高用地の取得についての項ですが、ここでは館高の敷地を市が買収したのと、それから館高の用地を取得したのとが相殺と、こういうふうになっていますが、これは等価交換といえますか、等価で相殺したのかどうか。これをひとつお聞きします。

藤原の用地は、次の三の一ですね。まだ買収してないところが千三百三坪ですか、四千二百九十九平米あるわけですが、この谷藤原の買収土地は運動公園として県のほうに事業をしてもらいたいということで運動しているということですが、この用地の買収ができないと、そういう問題が困難になりはしないかという問題が考えられますが、その点をお聞きしたいと思います。

それから、青柳団地が造成されておりますが、青柳団地にはサ

ルページのかなり広大な土地が二千坪ですか、取得されているようですが、この分譲の方法はどういうふうにやったか。この点もお聞きしたいと思います。

それから、帳簿上の問題ですが、損益計算書ですか、この中にこれは先ほど質問しました館高の等価交換という関係で売り上げ原価とあっせん土地売り上げ原価というように振りかえがされていますが、この内容について価額が等価交換ということなら問題はありませんが、価額の違いがあるとちょっと問題だと思ふんです。

私、聞いておりますのは、館高の跡地を坪四万円で市が買収して、造成するには市は土地のあっせんだけだということで、坪あの当時二万三千円ですか、坪数は違いますけれども、そのときの当局側の回答では、埋め立て要するに造成については県のほうで持つ。借り入れてやることですから、利子も県のほうで持つというふうな回答があったと思ふんですが、そのへんがどうなっているのか。

それから、損益計算のここでは特別利益を含めて赤字が約二千五百七十一万三千、これは利益になるか、差がありますが、損失金として千二百二十二万七千二百九十九円計上されていますが、これは貸し倒れ準備金や、その他の引き当て金の繰り戻し、繰り入れというふうなことで繰り戻した場合には、相当の利益が出るわけですよ。この特別損失として二千八百二十二万五千七百七十七円を繰り入れているわけですが、これは限度いっぱい繰り入れなくてもここでは損失になっていますが、損失をゼロとして繰り入れは限度内でやったほうがいいのではないかと思います。こ

のへんはどういうふうにお考えになつてゐるのか。

それから、貸借対照表の中で売り掛け金の九百六十四万九千八百五十八円、これも差し引き勘定で帳簿上整備しておりますが、当然売り掛け金は売り掛け金としてあげ、貸し倒れ準備金は引き当て金のほうで処理するのが当然ではないかと思ふんですが、その点をひとつお聞きしたいと思います。

それから、一ページの議決事項の中で参与の退職金支給についてというのがありますが、この退職金はどのぐらい出したのか。この公社の損益勘定の中にどういうふうに入っているのか。ちょっとわからないのでお聞きしたいと思います。

それから、事業計画の中で、谷藤原の開発用地の利息金が千五百七十四万一千円計上することになっておりますが、谷藤原の開発が遅れると相当長い期間利息の支払いが大きな負担になっていくんじゃないかと思いますが、これをどういうふうにお考えになつてゐるのか。お聞きしたいと思います。以上です。

企画課長（小沢正治君） 最初の館高用地でございませうけれどもこれは等価交換でございませう。

それから、谷藤原の未買収地の関係でございませうが、これはあそここの区域の外側の小さい土地が七筆だったと思いますが、その関係でございませうので、これは一応計画を具体化する段階でさらに積極的な交渉を開始する予定でございませうので、現在計画ははっきりしない段階であまりこじらしてもかえってまずいんじゃないかということで、一応交渉を中止しておるといふ関係でございませう。

それから、サルページの二千坪について、ただいま資料がござ

いせんので、資料を取り寄せまして御報告申し上げたいと思います。

それから、損益計算の損益関係の問題でございますけれども、やはり公社の帳簿のつくり方についてこのような扱い方をするよりな指導書がございますので、それに準拠しているわけでございます。売り掛け金の計上のしかたについてはそのためでございます。

それから、理事会の関係での参与の退職金の支給でございますが、これは一名でございまして、勤続六年十一月に対します七十二万円でございます。

それから、谷藤原の具体化が遅れることによっての利子との関係でございますが、これは私もそういう関係が非常に案じられますので、なるべく積極的に早い機会に計画の具体化をはかりたいわけです。それについては理事長である市長が特にその関係で準備を進めるための、やはり市独自という関係はかなり困難性があるのかということで県の協力を得るような折衝が開始されております。

〇一八番（渡辺軍治郎君）

館高の敷地の問題ですが、これは今までの報告では等価交換というよりな形ではなかったわけですね。

これは計算でいきますと、三億四千五百万に対して四億七千三百万というよりな計算上の差が出てくるわけですね。説明によりますと、坪二万三千円で一万五千坪を買った場合の計算をしたわけですが、用地の取得と、あの当時は取得だけということだったわけです。造成は県のほうで持つと、利息も県で引き受けるというよりなそういう報告があったので、そういうふうに了承して

あったわけですが、等価交換でいくと、一体総額はどっちいえば館山のほうで得をするような計算になっているのじゃないかと思ふんですが、等価交換だとそこに矛盾がありますが、そういう点はどのようにお考えになられているのか。最初の報告とどうしてかわつてきたのか。

〇企画課長（小沢正治君）

ただいま等価交換と申し上げましたけれども、あそこの新しい土地を開発公社が買いつけを行ないましてそれを県に提供して、そのかわりと申しますか、市が現在の館高の關係の取得ということで説明がぐあいかわるかったかも知れませんが、金銭の收受はないということで、そういう意味での等価ということばを使つたわけでございます。新しい土地を取得して県に提供し、現在ある館高の敷地、建物を市が取得するということで、差額の金銭の收受はないという形の契約でございます。

〇一八番（渡辺軍治郎君）

ちょっとおかしいんですが、そういうふうに最初議会で報告していると思うんですが、坪二万三千円で用地取得すると、大体それぐらいの見当だったわけですよ。それに埋め立て、造成すると大体三万円ぐらいになるだろう。その一万五千坪と、それから坪四万円で買った要するに館高の敷地ですよ。これとの交換ということじゃなしに、一方で館高の敷地を払い下げを受けると、四万円で払い下げを受けると、造成するほうは市があっせんするんだ。用地買収のあっせんということだったわけですよ。そうしますと、埋め立てをして等価交換ということになるわけですか。

〇企画課長（小沢正治君）

埋め立ては県が行なうということでございます。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 借り入れ利息のほうも県が引き受けるわけですか。この前そういうことでしたか。

〇企画課長（小沢正治君） その契約時点でのすべての経費、それから公社が規則で定めている手数料一切を含めてございます。

〇一八番（渡辺軍治郎君） そうすると、利子とそれから造成費も全部市がもってそれとんとんというのですか。埋め立ては県のほうでやるけれども、利息とか手数料とかそういうようなものは、利息はやはり市のほうで持つわけですか。

〇企画課長（小沢正治君） 県と開発公社あるいは市との間で交換による金銭の収受はないわけでございますから、新しい土地の造成関係の経費一切は公社が持つし、結果的には市になるわけですが、けれども、こっちの現在の館高の取得の額はそのまま所有権を市に移転するというので、その間に金銭の収受は行なわないというところでございます。ですから、新しい土地の造成費一切は市が持つ結果になるわけでございます。

〇一八番（渡辺軍治郎君） この前の報告とだいぶ違うわけですね。そこらの点で、あとで計算が実際にどのぐらいかかるのか、ひとつあとで示してもらいたいと思います。

それから、サルベージの問題ですが、二千坪の相当広い土地を青柳団地で取得していますが、土地を分譲する場合にどういうふうな分譲のしかたをしているのか。おわかりだとは思いますが、どうですか。

〇企画課長（小沢正治君） 分譲を行なう場合に、地主の要請あるいはその他の関係で、普通分譲と特別分譲の関係が起きてくるわけでございますけれども、サルベージの場合は独身寮用地の取得

申し入れがございまして、青柳団地の造成はサルベージの申し出があった後にそれが行なわれたということでございます。その関係から、あそこ土地の一角にサルベージから要請のあった独身寮の造成も含めてあれを実施するということで理事会の承認を得て実施したということでございます。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 一般的にみて、あそこをかなり分譲されていきますけれども、特定のサルベージというような会社で、相当市民は土地を分譲してもらいたいという要望かなりあるんですよ。ところが、あそこに行ってみると二千坪という広大な土地が一つの会社売り払われているという点で、付近の人の目からみると、なんか特定のそういうものに利益を与えるんじゃないかというふうなそういう印象を受けるわけです。そういうふうな風評もあるわけです。

ですから、土地を分譲する場合は、やはり市民の要望にこたえるようなそういう立場に立って慎重にやるべきだと思ふんですがこれは意見になります、一応分譲のしかたには問題があるというふうに思います。

それから、参与の退職金七十二万ですが、この算定の基準といえますか、そういうようなものはどういうふうにやられたのか。お伺いしたいと思います。

〇企画課長（小沢正治君） これは公社のほうで、市役所職員の退職手当の支給に關しまするルールを参考にいたしました、それに準じて行なったわけでございます。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 職員の退職金は積み立てをしていると思ふんですが、参与は積み立てしてありますか。

○企画課長（小沢正治君） 職員の退職手当の支給につきまして
積み立ては行なっておりません。

○一八番（渡辺軍治郎君） 職員の方は積み立て金しているんじゃないですか。退職金というのは全部の中の社会保障的なそういうことで退職金の積み立てとか、そういうようなものは職員はやられていると思うんですが、やられていないんですか。

○企画課長（小沢正治君） 職員が積み立てて負担しておりますものは年金関係の積み立てでございます、いわゆる共済組合を結成して、その共済関係の負担金は職員も負担してやっておるわけですが、別途これは地方自治法の退職手当、この支給に関しては職員は全然積み立てはしておらない。全額市費によって支給するものでございます。

○一八番（渡辺軍治郎君） 年金をもらえらるまで年限があればもらえるわけですが、途中で退職する場合はそれに対して還元的のものがあるわけです。そういう職員にならって退職金をきめたといえますから、そういう点ではあたらないじゃないか。なんかお手盛りのようなそういう気がするんですが、その点はどうなんですか。

○企画課長（小沢正治君） この参与の關係は、公社ではずっと従前常勤職であつたわけでございます。名前が参与であつても勤務実態は常勤職であつたわけでございますので、一応そういう形をとつたということでございます。

○一八番（渡辺軍治郎君） 質問を終わります。

○一五番（辻田 実君） 関連してちょっとお伺いしますけれども館山高校の用地について相殺したということでございまするけれど

ども、この相殺の月日というんですか、何日かということ。それからその額は幾らであつたか、わかりましたら、その二点についておしえていただきたいと思ひます。

○企画課長（小沢正治君） 金額等につきましては、ただいま資料を取り寄せますので。

昭和四十八年の十月に契約をしております。

○議長（吉田勇治郎君） 暫時休憩いたします。

午前十時二十五分 休憩

午前十時三十分 再開

○企画課長（小沢正治君） 館山高校の新しい敷地と、現在の館山の用地關係でございますけれども、市のほうで新しい土地の造成關係の用地買収、それから税關係の負担額、小作離作補償關係そのしたのもの、あるいは測量、その他の一切の諸経費、それから銀行から借り入れた資金の利子、そうしたものをすべて含めまして、さらに公社としてのあつせん手数料そうしたものを計算いたしまして、結果的に出ました三億五千九百四十三万円という数字が出たわけでございます。その額をもって県があの土地を買収し、市が現在の館山の用地を取得するというところで四十八年の十月三十一日に契約書を取りかわしてあるわけでございます。

○一五番（辻田 実君） そうしますと、これは四十八年十月三十一日に用地の買収、測量、その他一切を含んで三億五千九百四十三万円で、要するに契約が成立してある。こういうことになるわけですか。よろしうございますか。

○企画課長（小沢正治君） 三億五千九百四十三万円でございます。○一五番（辻田 実君） そこで、このとき、この契約の成立と、

それから領収書、その他の関係はどうなっておるか。これは私が心配する内容は、要するに不動産の売買ですから、公社は一つの企業体ですから、そうして交換される場合、一般的には登記をもって第三者に対して対外的に表示をするわけです。したがって、私は今時点で館山高校は館山市の土地に編入され、むこうの取得された土地は県に移管されておるかどうか。これがされないように思うわけですが、この点についてはっきりさせてもらいたいというのが第一点。

その前提に立つならば、開発公社のほうは、館山市のですよ。すでに三億五千九百四十三万円の金は支出しているということについては、これは開発公社の理事会等において報告がありましたので、これは了承できるわけでございますけれども、契約内容ということで県のほうに対してこれに対するとおりの契約の成立時点でもって領収書、そういう対外的にできる書類は取ったのかどうか。端的にいいまして、県との交換でございますから、県のほうの公社かどうかわけりませんけれども、それらに対して帳簿上収入が盛られたかどうか。領収書の発行によって盛られたということが明確になるわけでございますけれども、その領収書があるのかどうか。契約上のものなのかどうか。

これについては相殺ということでやりますと、単に開発公社だけが金を支出して、県のほうから契約書もらったから、契約をしたからということでもって、そうしてこれは相殺が成立したんだということと処理されると若干将来的に問題をかもし出す危険性があるのじゃないかというように感じがあるわけでございます。

したがって、私はこの際、四十八年の十月三十一日現在契

約をもったということは、領収書というものが県から取ったか取らないのか。まずそれを聞きたいわけです。それがわからないと次の質問が続行できませんので。

〇企画課長（小沢正治君） 先ほど、四十八年十月の契約と申し上げましたが、四十九年十月の誤まりでございます。訂正させていただきます。

普通は、登記と契約書との交換ということになるわけでございますけれども、今回の場合、これについては明けて五十年二月に登記してあるというのを聞いておるわけでございますが、これは確認いたします。

（「もう少し大きい声で」と呼ぶ者あり）

登記関係につきましては、いまだ一度書類で確認いたしたいと思っております。

（「休憩」と呼ぶ者あり）

〇議長（吉田勇治郎君） 暫時休憩いたします。

午前十時三十八分 休憩

午前十時五十分 再開

〇議長（吉田勇治郎君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

答弁を求めます。

〇企画課長（小沢正治君） 市の取得した土地につきましては、昭和五十年の二月十三日に登記済でございます。

〇二〇番（和田一郎君） ミンクのことでお尋ねいたします。

このミンク事業を始めてからミンクにかかった全部の費用は幾らであるか。また、その収益は幾らであるかをお尋ねいたします。

〇企画課長（小沢正治君） ミンク関係でございますけれども、こ

れは四十六年の十一月に購入いたしました、当時雄三十、雌七十計百頭購入して開始したわけでございますが、公社の帳簿上の支出は、四十六年度が百六十五万、四十七年度が百三万六千、それから四十八年度が百五万三千円、四十九年度が百三十六万二千円、五十年度の予定が大体三百三十四万前後を考へておるわけですが、そうしますと、累計といたしまして大体一千十一万四千円程度かかる予定でございます。

収入といたしましては、現在までに製品販売したのが一回しかございまして、その収入が百四十三万四千円でございます。

〇二〇番(和田一郎君) この事業は、市がやってみて結果がよければ農家に普及しようということで始めたことだと思います。しかしこれをみますと、四十七年度分は収入がみえますけれども、四十八年度、四十九年度はまだ製品化中と、なめし保管中であつて、このような事業が果して農家に普及して採算がとれるものかどうか。どのようにそのへんを考へておるか、お聞かせ願ひたいと思います。

〇農産課長(岩崎一郎君) 四十六年度よりお願いしたわけでございますけれども、一応これは気候あるいはえさの関係等から推定いたしました、やはり寒冷地帯に向くけれども、一応房州のような暖地でも向くのではない。製品も非常に優秀のものが取れるのではない。こういう試験的な飼養管理を試みたわけでございますが、やはり結果、若干寒冷地よるは劣るようでございますけれども、製品といたしましてはあまり大きな差はないような、一回しか製品は販売してございませんけれども、結果は出ております。しかしながら、現在の飼養管理の規模からいたしまして、や

はり頭数かなり増大いたしました、物件費、人件費等をカバーできない。こういう面が出たわけでございます。したがって、農家の十頭、二十頭あるいは百頭程度の副業的な経営には向かないんじゃないか。そのようなことで、企業的にやはり専門的に千頭以上、現在の開発公社の委託してございすあの規模では千頭あるいは千五百頭以上の規模に達すれば採算が十分合うんじゃないか。このような見通しでございます。

〇二〇番(和田一郎君) ここに製品にして五千円と、中にその半値の二千五百円で処分したのもありますが、製品を五千円で売るのに幾ら費用がかかったか、それがわかりましたらちょっとそれをお知らせ願ひたいと思います。

〇議長(吉田勇治郎君) 二〇番議員さんに申し上げます。計算が出てないようでございますが、後刻資料を整えさせて文書をもって報告するようにさせていただきますと思いますが、いかがでしょうか。

〇二〇番(和田一郎君) 了解。

〇一八番(渡辺軍治郎君) さっき聞き漏らしたんですが、安房支庁の跡地と北条病院との土地の交換についてですが、これはこの前の報告では北条病院の土地の価額は坪七万七千円で三百九十一坪、合計しますと、全部で約三千万、それから安房支庁の跡地のほうは坪十万円で三百六十二坪三千六百万になるわけですが、この事業計画の中に安房支庁跡地の利息の支払ひとして五百四十七万七千円計上されてますが、この交換でいきますと、公社のほうに六百万ばかり土地価額ではおおいわけですよ。多い公社のほうはどうしてこの利息を払わなければならないのか。そのへんが

わからないんですが、お答え願います。

○企画課長（小沢正治君） 安房支庁跡地と申しますのは、なおそのほかに警察に無償貸し付けの土地があるわけでございます。一括して公社が一応基金を支払いましたので、その関係でございまして、中央保育園との交換については確かに六百万多くなっておりますけれども、残りの千四百幾らへ一警察のほうに貸し付けられている土地があるわけでございます。その関係でござい

す。

○一八番（渡辺軍治郎君） 私が聞いているのは、なぜ利息をこっちのほうで、六百万円得するわけですよね。ですから、こっちのほうで割に合わなければ金を借りて払わなければいけないんですが、逆なんです。どうしてそういう利息を払わなければいけないのかということを知っているわけです。

○議長（吉田勇治郎君） 暫時休憩します。

午前十一時 一分 休憩

午前十一時十二分 再開

○議長（吉田勇治郎君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

○企画課長（小沢正治君） ただいまの安房支庁跡の資金と利子の関係でございますけれども、あの安房支庁跡地を一括して公社が買い受けました際に、銀行から借入金をしておるわけでござい

○一八番（渡辺軍治郎君） 市有地を公社のほうにかえたそのための関係でということですか、これは市有地を公社に一応払い下げるといふ形をとったわけですね。そうでしよう。それを北条病院と交換した。そういう関係での利子ですか。

○企画課長（小沢正治君） いわゆる安房支庁跡地と申しますのは中央保育園で交換した部分は一部でございまして、全体を一応支払いをしているわけですから、さらに中央保育園の関係も交換いたしまして、その土地の部分についての具体的な現金の支払いは、市から公社へ支払っていただかない以上、公社のほうの資金が依然として借入金として残るわけでございます。

○一八番（渡辺軍治郎君） そういう点、非常にまずいと思うんですよ。市と公社との関係で一応市有地を公社に払い下げて、市のほうではその金を利用してゐるわけですから、そのために公社のほうで利息を払わなければならないという、公社に利息の負担をかけているということで、公社のほうで金銭のやりとりの関係が非常に不明朗な印象を受けるわけですが、そういうのはスムーズにできると思うんですよ。市と公社の関係ですから余分の利息を払わないような、そういうことは当然できるはずのものだと思うんですが、こういうふうに五百四十七万七千円もそういうことで利息を払わなければならないのは、かなりむだなことをやっているように感じますが、そういう点は今後気をつけてもらいたいと思うんですが、この問題はこれで終わります。

先ほどのサルベージの問題で、二千坪土地を払い下げましたけれども、分譲土地は二年以内に建物が建たないと買い戻すというようになつてゐると思うんですが、かなり二千坪というところ

膨大な土地ですが、そういう関係は一体どういうふうになっていくのか。お聞きしたいと思っています。

○企画課長（小沢正治君） 特別分譲につきましては、公社とのそういう契約といえますか、条件関係の取りかわしはされていないはずです。

○一八番（渡辺軍治郎君） 公社のそういう規約とかなんとかそういうことはよくわかりませんが、一般的に考えて、特別にそういうサルベージという会社に限って一般の人と違うようなそういうことがやられているようですが、そういう点では、なんか分譲のしかたに問題があるんじゃないかと思うんですが、もしこれは分譲した場合に、その土地の転売というようなことはある程度期限を限って約束しているんですか。そういう点はどうなんですか。

○企画課長（小沢正治君） 一応、五年間は転売をしてはならないという契約になっております。

○一八番（渡辺軍治郎君） そうすると、特別な契約でですね。膨大な二千坪もの土地を特別の関係があるといつて払い下げた場合五年たったのちほもし家が建たない場合は、市はそれを特別なあれだから適用しないということになると、五年先にいけばあの二千坪の土地を転売するというようなこともできるわけですよ。そういう点から考えますと、一般の市民が住宅地をほしいという要望もかなり強いわけです。そういう点で非常に問題があると思うんですが、どうなんですか。そこらは。

○企画課長（小沢正治君） 先ほど申し上げましたように、あそこサルベージの関係は、開発公社がその分譲計画をする以前の申し込みであったということでございます。したがって、

公社が依頼を受けておった、たまたまそういう分譲関係が計画されたそこに適地が一部分あるというようなことでそういう形になったわけでございますが、当然やはりただいま御意見がございましたように、一般の住民の住宅事情あるいはそれに關します分譲事業というものの関係からの検討、そういった関係からやはり将来そういうようなことで、一般住民に対してなんかぐあいのわるいような面の起きそうな面につきましては、やはり積極的に公社がそういう造成を行なった場合、具体的にその所期の目的が達成されるような利用方法で処理されるように指導していかなくてはならないと思っております。

○一八番（渡辺軍治郎君） この問題、これで終わりますけれども、サルベージが先にその土地を契約していたというようなことで、もしサルベージがその土地を自分のところでほしいというならば、サルベージ自身が土地造成をすべきだと思いませんか。そういうふうに指導するのが、一般の土地分譲と違いますので誤解を受けやすい。そういうようなことになりすから、これは先にいけば転売するということよなことでと、あそこでは転売していません。だまってみているんじゃないか。市のほうは土地造成していて何だという市民のほうからそういう目でみられるのはあたりまえで、そういう点はひとつ気をつけてやってもらいたいと思います。以上です。

○一六番（安西益男君） ちょっと、お聞かせいただきます。

館高の件についてですけれども、館高の移転はいつ頃予想されているか。移転先の土地の造成は近くされるのではないかというふうに思っておりますけれども、そういった点で、いつ頃移転の

予定でいるか。お聞かせいただきたいと思います。

○助役（畠山 伝君） お答え申し上げます。

本年度中に、現在埋め立てやっておりますから、本年度中には造成いたしました、五十三年の三月頃までには完成するのではないかと思っておりますが、まだ県としても確実にいつまでということはいっていませんが、そうした程度で。

○一六番（安西益男君） 土地の造成のほうは近く完成するわけでございますね。そうしますと、館高の場合は移転するまで無償だというふうに聞いております。土地の造成された場所の、移転先の造成地の広い場所一万五千坪になりますか、その土地は造成後はどうされるのか。建物ができるまで期間相当あるわけですから、その間利用を、市民に開放してもらうとか、運動場に使わせてもらうとかいうことは考えられると思いますけれども、そういった点のあいてる期間、三年なり、四年なり建物を建てるまでその利用はどんなふうにか。利用は全然考えないのか。造成された場所ですね。

○市長（半沢良一君） 私、先般県の教育委員会に行きまして、正式ではございませんけれども、聞いたところによりますと、五十年途中で埋め立てを終って、五十一年度からかかりたい。これは県の予算の関係で予定どおりいくかどうかかわからないということでございますけれども、予定でいきますと本年度、来年の三月までに埋め立てを終って、来年の四月からかかるということになるわけでございますので、運動場、その他に利用する期間的余裕はないかと考えております。

○一六番（安西益男君） 建物に着手するということがされるなら

ばよろしいわけでございますけれども、五十三年乃至というふうになれば着手するまでの期間があるのではないかと考えておるわけでございます。そういったあいてる期間がなければけっこうです。

○一四番（石井輝久君） ちょっと一点、質問申し上げます。

この館山市開発公社という団体は、地方自治法に定められておりますが地方開発事業団に該当するものでございましょうか。それとも他のなんか法令に基づくものでございましょうか。御質問申し上げます。

○企画課長（小沢正治君） 自治法上の団体でございません。

○一四番（石井輝久君） そうすると、どういう団体でございましょうか。

○企画課長（小沢正治君） 民法上の財団法人でございます。

○一四番（石井輝久君） わかりました。了承します。

○議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。――御質疑なしと認めます。

次に進みます。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第二、報告第二号財団法人館山市環

境保全公社の経営状況説明書の提出についてを議題といたします。

報告第二号 財団法人館山市環境保全公社の経営状況説明書の

提出について

質疑応答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。

○一八番（渡辺軍治郎君） 文教民生委員会でもお聞きしたんですが、この損益計算書について賃借料として二百万、これは鯉南とか山中から清掃車を借り上げたときの支払いです、それと報償費の謝礼金としての三百万円、この五百万円はこれは臨時的な支出であって経常費とはみられないわけです。

館山市が山中清掃社から業務を引き継いだときに百万円しか寄付金を出してないんですよ。百万円ぐらいであれだけの事業を市がやるというのはかなり無理な話であって、当然このときに謝礼金や車の借り上げ料というようなものは、市のほうが寄付金として扱って処理すべき特別な、臨時的なそういう支出だと思うんですが、これを公社のほうに全部負担させますと、このままこれが赤字になってくるわけです。

だから、これは汲み取り料金の問題でも出てきますが、要するに赤字が出たからその赤字を解消するために料金を上げるんだということになっていきますから、そういう点で、この点は明確にしろもらいたいと思ふんです。汲み取り料金値上げ問題の中でも出てきますので、これを一つはっきりさせてもらいたい。

それから、減価償却費の四百九十万一千円ですが、これも内部保留されるものですから、料金値上げの対象としてみる場合に、それは当然この経費からはずすということが考えられるわけです。

もう一つ、車両売却損として車が廃車になったために百五十三万四千円というようなものが損金として計上されています。これは帳簿上資産を処理するためにボンコツになった車の額を大体そのまま計上しているわけです。

これも臨時的な経費で、汲み取り料金を値上げする場合に、赤字が千二百一十一万四千五百三十三円出ているということで、この赤字の解消ということが問題になってきますが、今申し上げましたようなものを差し引きますと、その経費は千四百三十三万四千円になるわけです。そうしますと、これは赤字にはならないわけです。この計算上は赤字になっているけれども、料金値上げをする場合に赤字の対象というようにすることで出されるのは問題があるんじゃないかというふうに考えますが、この点をお聞かせ願いたいと思います。

○衛生課長（石井 謙君） まず第一の臨時的支出の関係で賃借料報償費についてでございますが、これは三番目の御質問の車両の売却損にも関係するわけでございますが、九月一日から環境保全公社によっていたしておる関係上、経費の支出等もその環境保全公社ができてからの経費でございますので、これはこの中で落したわけでございます。

それから、減価償却の関係でございますが、これはいろいろ調査もいたしてみたわけでございますが、地方公営企業法の中にはっきりと減価償却が強制されているというようにございまして、私どもはあくまでも経費でございますので、そういうようなことで損益計算書にあらわしたわけでございます。

○一七番（石井武敏君） 一点だけお聞かせ願いたいと思います。

昭和五十年の資金計画の中で支出の部の一ページです。建物作業員の詰所をつくるという計画がありますが、今まではたしか六畳間に二十名近くの人が休憩していたということで建物を広くしようということなんですが、この宅造費のほうが高いように

思いますので、宅造費の説明をお願いします。

それから、この広さがだいぶ改善されると思いますが、ざっと構造はどういうようになりますか。お聞かせ願いたいと思います。

〇衛生課長(石井 謀君) 一一ページの車庫並びに作業員詰所、宅造費の関係で申し上げます。

藤原処理場の入口の左側に千七百七十六平米の土地が私有地であるわけでございますが、この関係につきまして地主の了解を取りつけてございます。そういうような関係でそれを埋め立てするというところでございます。

それから、車庫につきましては約四十坪を予定しております。

作業員の詰所につきましては二十坪を予定しておりますが、プレハブでなくて、本建築の予定で考えております。

〇一七番(石井武敏君) 大体わかりましたけれども、これは着手してからいつ頃までできる見通しですか。見通しがあったら。

〇衛生課長(石井 謀君) 現在の見通しは大体三カ月程度かかるような計画でありますが、これから夏にかけまして作業員も約六畳に十八名もあるというような状況でございますので、その間におきまして組み立て式のプレハブを一応考えておるわけでございます。

〇一四番(石井輝久君) 数点お伺いいたします。

四ページの事業外収益受け取り利息、円だろうと思えますから六万九千八百三十八円ですか、これの内訳を伺います。

引き続きまして、六ページ資産の部普通預金五百四十五万六千七百九十六円館山信用金庫ほか、このほかの内訳を伺います。

それから、引き続きまして、一一ページの営業外費用支払利息

息五百七十六万円、説明欄の借入金累計六千五百万円この内訳について御質問します。

御答弁によりまして、再質問いたします。

〇衛生課長(石井 謀君) まず第一点の受け取り利息の関係でございますが、六万九千八百三十八円につきましては当期間における預貯金の利息でございます。

次に、六ページの普通預金の関係につきましては、これは館山信用金庫のほかに千葉銀行館山支店。

その次に、一一ページの支払い利息関係につきましては、この資金計画におきましては今年三月の理事会において上程したものでございまして、当時は現状のままの料金で営業した場合については、四十九年度で三千五百万円借り入れておりますが、五十年では加えて三千万を借り入れしなければならない。合わせて六千五百万ということでここにあらわしてございますものが利息が年間五百七十六万こういうようなことでございます。

〇一四番(石井輝久君) ちょっと質問と答弁がたいへん食い違っています。いずれの質問も三ページにわたりました内訳をお聞かせ願いたいということでございます。金額の内訳。

〇衛生課長(石井 謀君) 六万九千八百三十八円というのは当期間内でございますので、この内容については現在手もとにございませんで早速取り寄せます。

この預金関係につきましては現在資料がございませんで、早速取り寄せましてお答え申し上げます。

一一ページの五百七十六万の内訳でございますが、これは五十年間度につきましては九月から、それから四十九年度に借り受けま

したものは一カ年間分これは利息が九・六%の額でございます。

午後 一時 再 開

〇 一四番 (石井輝久君) 利息を聞いた覚えはないのでございます。

〇 議長 (吉田勇治郎君) 休憩時に引き続き会議を開きます。

四ページの受け取り利息につきましては後刻文書で報告するといってお答えですから、それで一応質問を保留しておきます。

答弁を願います。

それから六ページ普通預金館山信用金庫ほか、先ほど館山信用金庫と千葉銀行館山支店という御答弁でございますが、その金額をお聞きしているわけでございます。御答弁をいただきたいと思ひます。

〇 衛生課長 (石井 謀君) お答え申し上げます。

まず第一点の四ページでございますが、受け取り利息の六万九千八百三十八円につきましては、館山信用金庫に三月三十一日の残高で二百九十五万六千九百五十円に対する利息が六万七千五百円、千葉銀行館山支店に対します預金が二百四十九万九千八百九十一円の利息が九千八百八十八円でございます。

それから、一一ページ同じく内訳を伺っておるわけでございます。以上、質問します。

次に、一一ページの支払い利息五百七十六万円に対する内訳で

〇 議長 (吉田勇治郎君) 計数的の問題で、時間を要するようでございしますが、後刻これを文書で御報告願ひたら。

ございますが、四十九年度分が三千五百万円、九・六%で一年分三百三十六万円館山信用金庫でございます。それから五十年

〇 一四番 (石井輝久君) これが終わりますと、関連して次の質問に移りたいと思ひます。したがって、答弁が不能であるとすれば質問を保留いたします。後刻質問いたします。よろしゅうござい

上げましたが、十カ月分を見込んでございまして二百四十万円というところでございますので、訂正させていただきます。この借り入

れ先につきましては未定でございます。

〇 一四番 (石井輝久君) 質問に対する御答弁、四ページの受け取り

〇 議長 (吉田勇治郎君) すみやかに資料をつくってきてください。

り利息これはわかりました。

〇 一〇番 (流山源次郎君) 昭和五十年年度の資金計画の中で事業収

入となつております五千二百七十五万四千円の中には、月に二回

汲み取る値上げの分が含まれておるのかどうか、その一点だけお聞きしたいと思ひます。

六ページの資産の部普通預金五百四十六万六千七百九十六円館山信用金庫ほか、これの内訳をお伺ひしたわけですが、これは一体答弁が終つたんですかそれで。聞いてませんよ。終つたのかどう

〇 衛生課長 (石井 謀君) これは当然含まれております。

うか。

〇 議長 (吉田勇治郎君) 一四番議員に対する答弁を保留し、午前の会議はこれにて休憩とし、午後一時開会いたします。

あと、一一ページの点はわかりました。これからの分ですから未定であるというのわかりました。

午前十一時四十二分 休 憩

以上、質問申し上げます。

○衛生課長（石井 謀君） 六ページの關係につきましてはお答えを申し上げませんでした。三月三十一日現在で館山信用金庫が二百九十五万六千九百五十円、千葉銀行館山支店が二百四十九万九千八百九十一円でございます。

○一四番（石井輝久君） 御答弁わかりました。

そこで、これは再質問いたしますが、財団法人館山市環境保全公社これはおそらく先ほど開発公社の關係で御質問申し上げますた御質問と類似でございますので、おそらくこれは民法上の財団法人というふうに理解するわけですが、そこで、この内容を拝見いたしますと、これは借入金全額民間の金融機関でございますがこれはいわゆる公営企業としてみなされる団体というふうには解釈できないのかどうか。つまり公営企業法の適用を受けられない団体というふうに理解してよろしいかどうか。この点をお伺いしたいと思います。

○衛生課長（石井 謀君） 公営企業としての融資は受けられないというふうに解釈しております。

○一四番（石井輝久君） 受けられないということは、公営企業法の中に該当しないということでございますか。その点、伺います。

○助役（畠山 伝君） そのとおりでございます。

○一四番（石井輝久君） これはあれでございますか、そのとおりというのは、法文の解釈をどなたかがされてそのように解釈されたのか。理解をされておるのか。あるいはまた、何らかの中央あるいは県等との接触の上でそう理解されたのか。その点、伺います。

○助役（畠山 伝君） これは公営企業の適用事業ではないわけでございますから、その中に地方公共団体の経営する企業の中で水

道とか、電車とか、病院とかいろいろ指定されておりますけれども、そういうものでもございませんし、地方公共団体が直接経営する事業とはみなされないわけでございますので、適用除外になっております。

○一四番（石井輝久君） それはしたがって、ここで法文の解釈をされた上で、そう認識されたというように理解いたしますけれども、してみると、県あるいは国とのコンダクトというか、接触の上で、そう理解されたのではないかというふうに理解してよろしいか。

○助役（畠山 伝君） ここでいろいろと法文も研究いたしました。なお、公営企業金融公庫のほうへも問い合わせまして、除外されるということでもございました。

○一四番（石井輝久君） 御答弁わかりました。

以上で、質問を打ち切ります。

○議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。――御質疑なければ次に進ませていただきます。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第三、報告第三号繰越明許費繰越計算書の報告についてを議題といたします。

報告第三号 繰越明許費繰越計算書の報告について

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑ございませんか。――御質疑なければ次に進みます。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第四、議案第四十七号館山市市税条例の一部を改正する条例の制定についてを議題といたします。

議案第四十七号 館山市市税条例の一部を改正する条例の制定について

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。御質疑ございませんか。―御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長（吉田勇治郎君） おはかりいたします。

本案を委員会付託並びに討論を省略して採決することに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

採決

○議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。

本案を原案どおり可決するに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって、本案は原案どおり可決されました。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第五、議案第四十八号館山市非常勤消防団員に係る退職報償金の支給に関する条例の一部を改正する

条例の制定についてを議題といたします。

議案第四十八号 館山市非常勤消防団員に係る退職報償金の支給に関する条例の一部を改正する条例の制定について

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。御質疑ございませんか。―御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長（吉田勇治郎君） おはかりいたします。

本案を委員会付託並びに討論を省略して直ちに採決することに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

採決

○議長（吉田勇治郎君） おはかりいたします。

本案を原案どおり可決するに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって、本案は原案どおり可決されました。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第六、議案第四十九号館山市民センター条例の一部を改正する条例の制定についてを議題といたします。

議案第四十九号 館山市民センター条例の一部を改正する条例

質 疑 応 答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。

○一八番（渡辺軍治郎君） 手数料の値上げの問題ですが、2の二号の展示即売とか商業宣伝、その他これに類する行為を目的としてホールを使用する場合、規定料金の二割増しと、それから催物で営利的なそういうものをやる場合には十二割相当額と、規定料金に上積みしているわけですが、この問題については営利が伴いますから、ある程度了承できるわけですが、一般の使用に供する別表四、こういう料金が一齐に値上げされていますが、これは市民センターをつくる際、市民の税によってまかなわれたというようになことでつくられたわけでありますから、これは市以外の人が利用する場合にある程度高い料金を考えてしかるべきだと思いがすが、市民が利用する場合の料金はできるだけ安くするのが当然だと思ふんですが、それを値上げした理由はどこにあるところにあるのか。お聞きしたいと思ひます。

もう一つは、付帯設備使用料の問題ですが、一万円を二万円ですか、そういうふうに相当大幅な値上げをされていますが、どういう理由によるものか。お伺ひします。

○市民センター館長（角田 巖君） 最初の付帯設備の使用料と経営施設の使用料は、渡辺議員さんの質問はさかさまになっているのではないかと思います。（笑聲）付帯設備の使用料のほとんどの使用目的は興業者がよけいでございまして、一般市民の方はほんのマイクホンとか、あるいは会議室の拡声装置のものとか

あるいは机というものがほとんどでございまして、この値上げにつきましては、昨年電気料が大幅に上りまして、他市の状況をみますと、館山市が相当こういう照明具類にしても安いのでございまして、この際、電気料の値上げなどの関係によりましてお願いしたわけでございます。

それから、経営施設の使用料でございますが、市民センターの食堂の使用料でございまして、開設以来ずっと一万円でやったのでございますが、やっぱり諸般の情勢からいまして、この程度値上げしても何らさしつかえないと思ひまして、市民センターの経営者とは話し合つてきめましたので、この程度の値上げをしたと思つております。

○一八番（渡辺軍治郎君） 最初の、これは催物とか、あるいは営業関係そういうようなものでやる照明設備とかそういうようなものはこれは別ですけれども、拡声機、その他長机とかそういうようなものを使うのは、営利を目的としたり、そういうようなものでなしに市民が利用する場合に使うものですから、そういうものは今までの料金に据え置いてほかのものを値上げするのが当然だと思ふんです。

そういう点では、この案には不満を持つ方で賛成できませんがもう一つは、経営施設の使用料が一万円から二万円と倍に上つていますが、あの食堂はかなり市の職員も利用したりしてあって、ほかの店を比べて非常に安いようにみえているわけですが、ある程度サービスの面もほかの店と違うように受け取っているんですが、こういうところの使用料を倍上げますと、結局やはり商品といひますか、売るものにひびいてくるということで問題があると思ひ

ますが、そのへんはどのように考えますか。

○市民センター館長(角田 巖君) 大体、よその館の状況を調査しますと、食堂なんか木更津なんか月に大体十五万ぐらいの使用料を取ってるわけでございまして、今回上げた理由については電気料の値上げとかいろんな関係で、一万円程度ではどこの市内の業者に聞いても、家賃としては安いのではないかというような話も聞きましたので、この程度なら実際現在やってる方は月に相当収益をあげているので、この程度上げてても現在のものを維持できるというようなことも聞きましたので、納得といえますか、話し合いの上において了解を得たものでございます。

○議長(吉田勇治郎君) 他に御質疑ございませんか。――御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長(吉田勇治郎君) おはかりいたします。

本案を委員会付託を省略したいと思いますが、これに御異議ございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

○議長(吉田勇治郎君) 御異議なしと認めます。

討 論

○議長(吉田勇治郎君) 討論に入ります。

○一八番(渡辺軍治郎君) 私は、市民センター条例の一部を改正する条例の制定について反対いたします。

という理由は、この特に催物とか、それから営業とか、そういう

ような利益の伴うようなものに対する値上げについては一応了承します。

それから、経営施設の食堂の使用料ですが、これはやはりこういう値上げがきっかけになって売るのが高くなるというようなところにも影響ないことはないと思うんです。

それと、付帯設備の使用料については拡声機とかそういうようなものはあまりたくさん使用するものはないと思うんです。ただし、机だとかそういうようなものは、あそこでいろいろ催しをする場合には相当使うはずであります。これは市民が利用するものですから、こういうものについてほかと同じように、営業やなんかと同じように値上げをするというようなことについては了承しかねるわけであります。

最近、一連の公共料金の値上げがずっと出されてきていますがこれは通告質問の中でも述べましたように、自治省の事務次官通達が手数料や使用料を値上げしろというようなことを地方自治体に要請をするというようなことの一環として、これも出されているというふうに理解されますので、そういう点では、政府が地方自治体のある程度統制するというような面について考えられますので、この議案には反対する者であります。

以上です。

○一八番(安西益男君) 私は、賛成という立場で、実はこの市民センター条例一部改正については、これは総務委員会等におきましても検討せられたわけでございますが、ただいま御説明のありましたように、利益を目的とする興行であり、そういったものは他市もそうであるということと、これは館山市民の使うことには

その点も確認してあるわけですが、その点には市民にそういう値上げはしないということであります。特に御承知のように電気料等の値上げに関連してのこういったスピーカーあるいは拡声機というものは出費の範囲内であるという点から、これは応分の、大した大きな金額ではないということから、これはこの程度はしかたがないんじゃないかということでございます。

さらにまた、特にこの値上げについては自治省の関係はさらになんということも当然でございますして、営業施設の一万円を二万円ということも、やはり相当利益をあげているという立場から十分了解できることではないかということで一応認めたといい立場をとっておるわけでございます。

そういった面から、大幅な市民に対する迷惑はほとんどないというそういった観点から、こうした一部改正については賛成という立場をとっておるわけでございます。

○議長（吉田勇治郎君） 他に討論ございませんか。——討論なしと認めます。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。本案に対する採決は起立により行ないます。

本案を原案どおり可決するに賛成の諸君の起立を求めます。

（賛成者起立）

○議長（吉田勇治郎君） 起立多数。よって、本案は原案どおり可決されました。

議 案 の 上 程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第七、議案第五十号 館山市国民健康保険税条例の一部を改正する条例の制定についてを議題といたします。

議案第五十号 館山市国民健康保険税条例の一部を改正する条例の制定について

質 疑 応 答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑を願います。

○一四番（石井輝久君） 御質問申し上げます。

議案第五十号でございますが、この末尾に近く「この条例は公布の日から施行する」ということでございますが、いつ公布をなさるのか。これをまずお伺いしたいと思います。

○税務課長（小倉澄男君） お答えを申し上げます。

御議決をいただいた日でございます。

○一四番（石井輝久君） わかりました。

以下、条文を追って御質問申し上げたいと思うわけでございますが、第三条の「百分の百六十」を「百分の二百二十」に改めるというところでございますが、これは市民税の所得割の総額の案分率をアップするというところでございますが、これで大体大づかみで、これによって金額にして一人頭でございましょうか、単位は何であつてもかまいませんが、単位当たりの金額のアップはおおづかみでどのぐらいになりましたでしょうか。お伺いします。

○税務課長（小倉澄男君） お答えいたします。質問に的確なお答えになるか、ちょっとわかりませんが、保険税は所得割り額と資産割り額、それに均等割り、平等割りが加算されました総額とい

うこととなりますので、全体の金額としての額といえますと、総額で幾らの税額が所得割りによって前年度よりもアップされたかという御質問でございましょうか。

〇一四番(石井輝久君) ちょっと質問の趣旨が、あまりうまい質問じゃないんでわかりにくいかと思ひますので、もう一べん質問申し上げます。

市民税の所得割り総額で、現行で億六千八百八十八万四千円、これに対するアップ百分の二百二十、こういうことであろうと思ひんでございしますが、要するに所得割りで今まで現行で百六十四であるものが、この条例改正によつて二百二十になるということでございしますが、このアップによつて平均単位個人としてみた場合にどのぐらゐ個人の金額的にアップになりますでしうか。この点をお伺ひいたします。

〇税務課長(小倉澄男君) お答えいたします。

所得割り、これはただいま申し上げましたように、あくまでも限度額以上の十二万円以上の減額がございしますので、わかりやすい意味をもちまして八十万の所得のあった方ということで仮定をいたしまして、その人の国保の所得割りに対する税額が幾らかということとなりますと九千五百円でございします。そして、昨年の率で申し上げますと八千四百六十円でございします。ですから、実質的には八・二%の所得割り額だけで申し上げますと増ということに相なります。

〇一四番(石井輝久君) 以下、順次四条、五条、六条と、追つて御質問申し上げます。

第四条は、これは固定資産税、資産割りでございしますが、同様

の趣旨で、以下固定資産税、被保険者総数、被保険者世帯別平等割り、このように単位金額に対するアップの金額を御説明願ひたいと思ひます。

〇税務課長(小倉澄男君) お答えいたします。

第四条の固定資産のほうでございしますが、固定資産税額の平均で申し上げますが、五十年度におきますと、平均が固定資産税額割りで課税いたします総額でございしますが、一億三千八百八十万五千円でございします。四十九年度が一億九百九十九万四千円、そのアップ率が資産額の場合には二六・二%、平均の場合でございします。先ほどの場合は八十万という方を例にあげましたが、このたびは平均額でございします。

それから、第五条の均等割りでございしますが、均等割はあくまでも均等割でございしますので、算術計算をいたしまして、昨年の四千二百六十円に対して五千五百二十円ということとでございします。その率は二九・六%のアップ。

それから、平等割り、第五条の二が平等割りでございまして、これがこのたびは八千九百四十円、四十九年度六千八百四十円でございしますので、そのアップ率は三〇・七%ということとでございします。

〇一四番(石井輝久君) 次に、第十二条これは低所得者に対する条文でございしょうけれども、千七百円を二千五百六十円にアップしますと、アップ率概算で五〇%、それからこの条文の最後千八百八十円を二千七百四十円に改めました場合には、アップ率五〇%を越え五〇%強になるはずでございします。

この条文を追つて第三条以下ずっとながめますと、今も参議院

でおそらく国会の会期末で、例の郵便料金あるいは酒税、たばこの値段、その討議が重ねられておると想像いたしますけれどもこういった一連の国民生活に関連する非常に大きな値上げの渦といえますか、波の中でこの国民保険税が低所得者を対象とするものだけでも五〇％強のアップということでございます。第三条にいたしましたも八・二％、それから四条で二六％強というように相当大幅な負担増になるように理解いたしますが、この点に対する御答弁をわざわざしたいわけでございます。

○ 税務課長（小倉澄男君） お答え申し上げます。

ちょっと、石井議員が申された最後の減額世帯は五〇％減額がよいになったのでございます。逆でございますして、五〇％それだけよい減額するわけでございます。

それから、第一回目の八十万という下の所得の例で八・二％の増ということでございますが、議案の説明のときにも申し上げましたとおり、国民健康保険税は、課税方法が応能割り、税の精神と、それから相互共済というような、扶助というような応益割り両方採用いたしております関係上限度額が設けてあるというようなことから、非常に簡単に算術平均ができないでまことに恐縮なんです、一応それを平均いたしましたして、前回保健課長からいきましたように二三・三％の税額で増ということでございます。算術平均的なものが前回申し上げましたように、所得割りで三四・一、資産割りで一五・五、均等割りで三九・六、平等割りで三〇・七、それらを平均いたしますと二三・五％というパーセントになるということでございますして、国民健康保険税として調定すべき三億九千四百七十三万五千円を課税する、調定すべく計算した

試算の結果は、このような案分率が適當であるということと提案いたしました次第でございます。

○ 一四番（石井輝久君） 先ほどの私の質問中、率を逆にしました点、これは議長さん訂正いたしますので。

御説明はわかりました。そこでもう一つ、昭和四十九年度のもう出納閉鎖も過ぎましたので、保険税の四十九年度の滞納額がありましたらお示し願いたいと思います。同時に、五月末締めました収納額、それから滞納額をお示し願いたいと思います。

○ 収納課長（館石勘治君） 保険税の昭和四十九年度の五月末現在における収納額は三億四百六十九万九千八百六十六円でございます。

未納額は千八百三十二万六千十円でございます。

○ 一四番（石井輝久君） 関連いたしまして質問いたします。

昭和四十九年度で五月末、ただいまお示しの数字の収納、それから同日現在の未納額ですが、千八百三十二万六千十円ということでございますが、これは四十九年度においてすでに千八百万の未納があるわけでございます。そこにもってきて、ただいま上程されておりますアップ、こうなりますと、四十九年度においてすらこれだけの滞納があるにもかかわらず、この程度アップする。一そのの滞納を生むおそれがある。私はこのように考えるんですが、この点につきまして御見解を示していただきたいと思ひます。

○ 収納課長（館石勘治君） 五十年度におきます保険税の収納の見込みは、調定に対して九八％を見込みまして、収納見込み予定を組んでおります。

○ 一四番（石井輝久君） 収納見込みが九八％、それはいいんですが、当初予算四億二千三百三十九万七千円これに対する収納の見

通してございますか、それとも補正後でございますか。伺います。

○収納課長（館石勘治君） ただいま九八%と申しましたのは、保険税の現年度課税分の調定額に対する収納率でございます。なお、繰り越し分に対しましては、一応繰り越し調定に対しまして五〇%を見込んでございます。

○一四番（石井輝久君） それでは、御答弁はわかりましたが、この条例が仮りに可決されて即日公布という先ほど御答弁をいただきましたが、本日可決されますと、本日公布され施行されると思いますが、その場合に、総額におきまして一体補正はどのぐらいになるでしょうか。お伺いします。

○保健課長（越路良夫君） お答え申し上げます。

今回、この改正条例によりまして、それぞれの案分率によりまして調定を見込みましたのが三億九千四百七十三万五千円でございます。

それから、五十年年度の国庫負担金中、現在歳入の中に前年度課税といたしまして調定見込みが四億二千五百三十四万七千四百円ということで説明にございますが、これは過日私の方から申し上げましたように、四十九年度の決算が終了いたしましたので、その結果、約四千三百万余りの繰り越しを生じておりますので、それを五十年年度の保険税の案分に際しまして、そのうちの三千万を減税の財源に充てるということで現在三億九千四百万余りを予定したわけでございまして、ここに当然この予算書の上にございまして調定見込みの額とは差が生ずるわけでございますが、これは今後の医療費の支払い状況あるいは国からの支出金の歳入状況等いろいろな流動的な事項がございしますので、それなども見きわめ

ながら将来についての補正を考えておるわけでございます。

○一四番（石井輝久君） 大体、御趣旨はわかりますが、質問は本年度計上されております国民健康保険税四億二千三百余万円、これに対してこの条例が可決された場合にそれぞれアップされてまいります。そうしますと、総額において予算額で幾らにふくれあがるかということでございます。御質問いたします。

○保健課長（越路良夫君） ただいま申し上げましたように、予算に対しては予算説明書にございますように四億二千万、これより減になるということでございます。

○一四番（石井輝久君） これはあとで、それでは計数で御説明願います。ここでやりとりしてもあれですから。

低所得者の減額ということとは簡単にわかるんですよ。先ほどもっと訂正いたしました。しかし所得割り、資産割り、均等割り、平等割りと、これでそれぞれで先ほど御答弁いただきましたが、それぞれでアップしていながら、予算総額で四億二千三百余万円がこれより減額補正される将来。というようになるわけでございます。その点はそれで、私の質問は打ち切りますが、後刻また計数で御説明をいただきます。議場でなくて。

これをもって質問を打ち切ります。

○一八番（渡辺軍治郎君） 保険税は毎年値上げされているわけですが、予算では三四・六ですか、一ですか、パーセントの値上げになっていたわけですが、算定時で二三・五%に減っておりますが、予算当時二千五百九十四万という事務費の超過負担が計上されているんですが、この超過負担はどのように解消されたか。この点をひとつお伺いしたいと思います。

それから、安分率の算出資料によりますと、所得割りが前年度の算定時には四五%であったのが四三%に減って、資産割りのほうは一五%が一七%にふえております。これはどういう関係でこのようになったのか。

それから、被保険者の総数ですが、昨年の算定時と比べますと八百二十人減っております。また、被保険者世帯者数で二百三十四世帯が減っておりますが、どのような理由でこういうふうに減ってきているのか。その点を一つお伺いします。

それからもう一つは、十二万円以上のカットされた分が一億二千三百万円あるということですが、国民保険が相互扶助の観点というところで運用されているわけですが、所得の多いものが多く納めるというのが当然だと思ふんですが、十二万円以上でカットするというのは制度的な問題でありますか、もっとこういう問題について、これは国の委任事務ですが、十二万円以上という制限はやるように運動をしているのかどうか。そういう点をお伺いします。

○税務課長（小倉登男君） 最初の二%の変動の件でございますが三億九千四百七十三万五千円を調定いたさなければいけないわけでございます、それを調定いたすためには、ただいま渡辺議員が申されたように、十二万の限度額の控除とか、減額世帯十二号該当の減額、さらに擬制世帯減というようなものが先般御説明申し上げましたように、一億五千百一十萬円の減額がございまして、それを課税するためには、ここにございまして五億四千六百五十八万円にこの案分率をかけていかなければ出てこないということでございます、それをいろいろの角度から試算をいたしました

わけでございますが、この前回の課税の配分の四五、一五、二六、一四という率をそのまま適用いたしますと、三億九千四百萬が結論といたしまして調定できないということでございます、その結果、どうしても所得割りの二%を資産割りに移さざるを得なかつたという理由でございます。

つけ加えて申し上げますと、そのまま課税するためには五億四千六百萬をもう少し上回りました額にこれを掛けていかないと、そのもとが出ないということでございます。結論といたしましては、均等割りも上るし、平等割りもこれ以上上っていくというわけでございます。そのための操作がどうしてもこの二%の変動、応能割り内の変動において、これが三億九千四百七十三万五千円に落ち着いたということでございます。

それから、被保険者の変動でございますが、国民健康保険は、社会保険、給与をお取りになっていた方が年度途中におきまして退職されたとか、さらに今度新しく就職されたとかいうことが非常に激しゅうございまして、毎月健康保険の変動状況は六百人ぐらいでございます。ふえたり、減つたりの結果が年間を通じての変動がでございます。

さらに、健康保険世帯の変動も同様でございます、それぞれ世帯の転入、転出によりまして移動がこういうふうになるわけでございます、一応目安として本年はこの世帯を基準といたして計算したということでございます。

あとは、保健課長から。

○保健課長（越路良夫君） 第一点目の事務費の関係でございますが、五十年度におきましてはまだ算定方式、その他については未

定でございます。なお、四十九年度の結果をみてまいりますと、当初千六百三十万というところでみただけでございますが、その後の算定方式あるいは国家予算の中で約四百七十万程度増額ということに相なつたわけでございます。

それから、最高限度十二万円の超過限度の関係でございますがこれにつきましては現在、健保の保険料との関係あるいはまた国保の被保険者の負担限度あるいはその受益の限度等の中で、現行法上では十二万円ということでございますが、これはやはり国保だけの問題ではございませんで、社保全体の中でこの健保の問題を取り上げ、国においても五十年度は据え置きでございますが、

来年度あたりは増額されるような傾向がございますが、これはやはり地方税法の改正との関係もございまして、今後の問題になるうかと思いますが、この点につきましては、市長会あるいは担当課長の会議におきましても増額についての運動はもろんやっているわけでございます。

〇一八番（渡辺軍治郎君） これは公共料金の値上げと同じ性質のもので、すなわち問題にするんですが、事務次官通達では、超過負担というようなものではできるだけ解消にとめると、しかし手数料や使用料、公営企業の料金は値上げしろと、値上げする場合には起債のことも考慮するというような、あめとむちのようなふうなふうな形で地方自治をしばるようなことがやられているわけですよ。そういう中で、自治省は超過負担の解消というふうなこともいっているわけですから、そういう点では事務費の超過負担解消につとめるように努力するのが当然だと思ふんです。

また、上限の十二万円以上はカットされていますけれども、最

近の物価上昇の中で名目的な所得はふえていっているわけですよ。そういう点からいけば上限をもっと撤廃するなり、上限をもっと引き上げるなり、そういうことは当然だと思ふんですが、そういう努力をしてもらいいたいと思ふんですが、そういう点についてどのように考えておられるのか。お聞きしたいと思ふます。

〇保健課長（越路良夫君） この十二万円の課税限度の制定された趣旨があるわけでございます。その趣旨は、先ほども申しましたように国民健康保険を利用するといひますか、それによって医者払いに充てると、またその受益の限度からの一つの面、それからなお、社保、健保等との関係、なお保険のお互いに助け合う相互扶助、その他の精神からいきまして十二万円の限度があるわけでございます。これらにつきましては法律の制定事項でございますので、この引き上げ等につきましては、やはり現在の情勢に見合うように改正ということについてはわれわれ努力するわけでございますが、やはりこれは法律事項でございますので、意見具申ということでは強力になお進めていきたい。このように考えております。

〇議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。――御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

〇議長（吉田勇治郎君） おはかりいたします。

本案を委員会の付託を省略いたしたいと思ひます。これに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

討 論

○議長（吉田勇治郎君） 討論に入ります。

○一八番（渡辺軍治郎君） 私は、五十号議案の保険税条例の一部を改正する条例の制定について反対する者でございます。

というのは、予算編成のときにも、これは毎年保険税が値上りしておいて相当市民の生活を圧迫しているということで、当初予算でも反対討論をしたわけであります。

その当時と算定期間では、二三・五％というふうに低くはなっておりましてけれども、一世帯当たり四万五千四百七十六円ぐらゐになりますか、一人平均一万五千五百九十九円というよりな負担になると思うんですが、四十九年には四四・二％上っているし、毎年こういうふうに保険税が上るということは市民生活を圧迫するということだと思ふんです。

私は、国民健康保険税を本当にもっと安くするためには、ただいま申し上げましたように、超過負担を解消すること、当然事務費の超過負担は国に出させること。もう一つは、先ほど申し上げましたような上限をもっと引き上げて一般の保険税を安くすること。もう一つは、今のように医療費が毎年毎年値上げされる傾向というのが出てきているわけです。ですから、このままでいきますと、医療費が上ればそれが全部国民保険税にかぶってくるというところで、毎年毎年かなり大幅な保険税の値上げがわかるわけです。

そういう問題を解決するためには、今の国が四〇％ですか、こ

れでおさえているのではなしに、もっと国の負担分を四五％なり五〇％に引き上げない限りは、この問題は解決されないというふうに考えますので、そういう方向に市当局も目を向けて運動をひとつやってもらいたいということをつけ加えまして、この五十号議案に反対する者でございます。

○議長（吉田勇治郎君） 他に賛成の討論ございませんか。他に討論ございませんか。――討論なしと認めます。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。本案の採決は起立により行ないます。

本案を原案どおり可決するに賛成の諸君の起立を求めます。

（賛成者起立）

○議長（吉田勇治郎君） 起立多数。よって、本案は原案どおり可決されました。

暫時休憩いたします。

午後二時 一分 休 憩
午後二時十五分 再 開

○議長（吉田勇治郎君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

議 案 の 上 程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第八、議案第五十一号 館山市廃棄物の処理及び清掃に関する条例の一部を改正する条例の制定についてを議題といたします。

議案第五十一号 館山市廃棄物の処理及び清掃に関する条例の

一部を改正する条例の制定について

質 疑 応 答

○一〇番（流山源次郎君） 月二回のくみ取りの料金が前年度の事業収入の五千二百七十五万四千円の中に入っていないということはわかりましたが、先般の全員協議会におきまして船形地区に大体七十五軒ぐらいの月二回くみ取りのうちがあるというお話がございましたが、これは人数割りを七十五に加算していった場合には船形地区におきましてはくみ取りの一割強の線になりますが、館山市全体におきましては大体これぐらいのそういう家庭があるのかどうか。

それから、この二回くみ取りの家庭の実態を市としては値上げするについて調査をしたかどうか、その点について御質問いたします。

○衛生課長（石井 謀君） 第一点目の二回取りの割合でございますが、人頭制、従量制を合わせて一万五百五十四軒あるわけでございますが、このうち二回取りを行なっておりますものが六百軒でございます。

ただし、この数字は本年の三月一日で調査したものでございます。

それから、二回取りの状況等を調査したかどうかということでございますが、いろいろ現場まで行って調査したわけではございませんが、作業員とか、あるいはいままでの関係を課内でいろいろ検討し合ったわけでございますが、確かに便つぼの小さい世帯があるわけでございます。そういうような小さい世帯に対して二

回取りをした場合に相当の負担になるということも考えたわけでございます。そういうことで本来ならば二回取りも一回取りも作業の内容、あるいは車の燃料等、そういうものも一緒にございしますが、その半額程度を上げていたきたいということでお願いしておるわけでございます。

○一〇番（流山源次郎君） 私も前回の全員協議会の席上でこの問題を出しましたが、一応ただそういううちがあるということだけで二度取りの場合の料金が高いとか安いとか個人的な見解を述べてはいかぬと考えて、船形地区に大体二十軒ぐらい調査しましたし、またよく話をしてみたんですが、二十軒回るうちの中に自分の持ち家でなくして人のうちを借りているという方もございまして、うちの構造自体を見たときに非常にこみ合ってしまったて、便所だけを直すということができない実態のうちがあるんでございます。その方たちが料金の線は実は市の提案としては一カ月の半分程度ものを二回になるから人数割りを取られる。お宅なんかはどういう考えかということを開いたところが、額は高いということ言うけれども。私なんかは半月経つと便所が一ぱいになってしまつて、まごまごすると流れてしまふ。それですることができないから隣り近所に便所を借りに行くんだという切ない状態だから値上げされてもしようがないでしょう。取ってもらえればいいでしょうというのが回つたうちの実態でございました。

たまたま私きのう議会へ出てくる前に近所の方から、月二回という約束だったのが半月たつても取りに来ない。私なんかは二十日目に市に取りに来て下さいというのを電話したけれども来てくれなかった。四回電話したけれども来てくれなかった。前回

は流山さんにお願ひしたらすぐ来てくれた。今回四回お願ひしたけれどもまだ来ない、また行つて来て下さいということで、私また頼まれて公社へくみ取りをお願いに行つた状態でございまして、値上げをするということになったら、そういううちがわかつているんですから、二回取るうちはわかつているんだから、計画を立ててきちんと、実際問題としてそういった二回取る、よその便所を借りなければならぬということをやることができるとか。

計画ができるかどうかお聞きしたい。もしそれができなければ値上げするということはできないと思うんですが。この点について答弁を聞いて終りたいと思います。

〇衛生課長(石井 謙君) 私どもいつもそういうような連絡があったときには直ちに行くように作業員に対して話しておるわけでございますが、私どもの責任においてそういうことのないように今後とも努力してまいります。

〇一八番(渡辺軍治郎君) この問題は文教民生委員会にも出されたわけですが、私はこの問題については反対の立場から質問するわけですが。

公営企業ではない、先ほどの公社が財団法人であつて公営企業法の適用は受けないという答弁がありましたけれども、ごみとかくみ取りとかという事務は当然直営でやるべきものなんです。公共衛生で非常に重要な問題ですから、それを便宜的というか、あゝのときの情勢で公社でやるというふうにきまつたわけですが、内容そのものは公営企業的な、公共事業としてこれは考えるのが妥当だと思ひんです。

そういう立場からみますと、公営企業法の第三条は、公営企業は「本来の目的である公共の福祉を増進するように運営されなければならない。」とあります。地方財政法の第六条の「(公営企業の経営)」というところには、公営企業の経営は、その性質上当該公営企業の経営に伴う収入をもつて充てることが適當であるけれども、適當でない経費として経営に伴う収入のみをもつて充てる事が客観的に困難であると認められる経費を除いております。そこでお尋ねするわけですが、先ほど事業計画の中で二百万、

三百万、五百万の臨時的な経費、これは山中から公社に移る場合に車の借上料と謝礼金を払つた五百万、当然これは当時の状況からみて市が負担すべき性質のものだというふうに考えるのが、地方財政のためまえからみてこういう経費を事業計画の中に盛っておりますが、当然市長は赤字だから料金を上げなければならぬ。そういうことで料金の値上げがなされてきているわけですが、当然この五百万円、あるいは減価償却の四百九十万一千円、それから車両売却損としてのボンコツとなつた車の百五十三万四千円、こういった経費は客観的に経費として見込むことが困難な問題ではないか。こういうふうに見られるわけです。こういうものを経費から除外いたしますと実際には千百四十三万円になるわけです。ですから千百二十一万四千五百三十三円という欠損は、この経費を除けば逆に利益が出るというような内容で、赤字だから料金を値上げしなければならぬということに該当しないと思ひんですが、そのへんをどのようにお考えになつてゐるのか、まずこの点からお聞きしたいと思ひます。

〇助役(畠山 伝君) お答え申し上げます。

このたびの御提案申し上げました分は、そういう分はさておきまして、さて五十年年度だけでもひとつ黒字になり得るようになるといふようなことであるわけでございます。そこで初めにただ赤字だからそれを解消するためやるんだということにつきましましては、やはり八十、七十という案はあるわけでございますけれども、公社理事會におきましてはそれではあまりにも住民に対する影響が大きいだらうというようにことで六五%、これで進めてお願い申し上げたいということでございます。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 五十年年度の赤字ということで、赤字を解消するといいますが、五十年度はこれから先あるわけで、一応推定では積算方法が出されておりますが、積算方法が出された数字そのまま信用しろといつても無理だと思ふんです。

ここで出されている資料によりますと、五十年年度の現行としての経費が八千三百三十万三千円になっております。これは五十年年度の改定でも八千七百七十一万九千円ですが、この中に八百四十九万六千円という減価償却費が含まれているわけです。さっきも言いましたように客観的に見てこれは当然減価計算といひますか、赤字計算をする場合に当然赤字の内部保留として赤字を消していくような性質のものが入っているわけです。こういう点からみても現在の料金の事業収入ですよね。五千四百六十五万四千円あるわけですが、これが五十年年度の改定では八千二百七十八千円になっていますが、私は五十年年度の事業収入をもとにして三五%の値上げをした場合にどのくらいになるかというのを試算してみたいんですが、それによりますと三五%の値上げで七千三百七十八万二千円になるわけです。それでいきまして八千七百七十一万九千円の営

業費から減価償却を引きますと七千三百二十二万三千円が五十年年度の改定ということになるわけでございます。これでみると三五%で計算したほうが約五十万円の利益になるわけです。それを六五%上げるといふことはたいへんなこれは増額が出てくるわけです。いま言った事業収入に一・六五をかけますと九千十七万九千円になるわけでございます。この増額分は三千五百五十二万五千円の増額になるわけでございます。こうしてみますと八千七百七十一万九千円の経費をこの中から引いて、さらに内部保留をみますと千六百九十五万六千円の利益が出てきます。

こういう計算になるんで、結局三五%の値上げをしても内部保留を引いた額とやはりとんとんになるということ、六五%という値上げが出している積算と、現在入ってくる収入と経費との関係でみると値上げしなくてもいいということになるわけです。その点をどういふふうに計算されているのか。

〇衛生課長（石井 謙君） 減価償却の關係について、内部保留といふようなことで相当額の費用の減といふことになるわけでございますが、私どもはあくまでも公営企業法の中の減価償却でいろいろ検討してみますと減価償却が強制されている、したがってたとえ利益の少ないときや欠損の生じたときに償却を見合わしたり、利益の多い時に多額の償却を行なうことをしてはならないといふことがこの中にございますので、あくまでも内部保留といふことにはできないと思ひますし、しかも内部保留の場合については、黒字の場合については支出が伴っておりませんのでいいかと思ひますが、赤字の場合にはこの点は非常に問題があると思ひます。

なお、減価償却につきましては、車両だけでございますが、車両の耐用年数が三年でもあることだし、一度に減価償却を落とすということについては次の車を購入する場合について大きな支障をきたすというようなことで、こういうことで減価償却費をみてあるわけでございます。

○一八番（渡辺軍治郎君） 三五％で計算した場合にこうなるというのが、だいたい開きがあるからその点を聞いていたわけです。

○衛生課長（石井 謙君） 三五％の試算のお話がございましたが私のほうがお示しをさせていただきます改定料金については、この時期は七月一日より値上げで計算してあるわけでございます。

○一八番（渡辺軍治郎君） 私はそっこのほうから出された数字に基づいて事業収入あるわけです。この三五％値上げという数字が出るわけです。全体でどのくらいの収益があるのか、そして年間の経費が一体どれくらいあるのか、差し引きすれば勘定が出るわけです。その数字とあまりに資料で出された推定計算との違いがあるから一応私は計算してみたわけです。

それから地方財政法の第六条の自治省の「通知」というのがあるわけです。この通知の中には、一切歳出もおおむね八割程度を収入で見込むというのが妥当だということが出ています。これは主としてこの経費を当該事業の経費に伴う収入をもってあるということ、経費の八〇％程度を収入でみるということになります。これも計算してみますと大体五千九百八十四万五千円というように経費になるわけです。八千三百三十万三千円の経費になっているわけです。ですからいま言う減価償却、客観的にみて要するに実質的な赤字ということを見る場合には、減価償却

を引いてみるのが実質的な赤字ですよ。当然経費で落ちているわけですから、だからそれを差し引いて八〇％でみますと経費は五千九百八十四万五千円なんです。だいたい開きがあるわけです。八千三百三十万三千円とこの程度の収入を見込むということになると、さっき計算した三五％で計算すると収入のほうが入るとふえるわけです。三五％で計算しても、こういうことがはっきりしなければこの値上げを認めることはできません。

○議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。――御質疑なしと認めます。

おはかりいたします。……………

議事進行の発言

〇一五番（辻田 実君） 議事進行。

ただいま議長は質疑を打ち切っておきながら、再開することを宣告せずに許可するということは、議事進行上非常に問題があります。ですから、ただいまの議事について質疑を続行するんだからその旨宣告してから質疑を行なっていただいたいと思います。

〇議長（吉田勇治郎君） 暫時休憩いたします。

午後二時四十五分 休 憩

午後三時 再 開

〇議長（吉田勇治郎君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

発言の取り消し

〇議長（吉田勇治郎君） ただいま質疑終了後の渡辺議員、市長、両発言を取り消すことに御異議ありませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

〇議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

委員会付託の省略

〇議長（吉田勇治郎君） おはかりいたします。

本案について委員会付託を省略することに御異議ありませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

〇議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

討 論

〇議長（吉田勇治郎君） 討論に入ります。

〇一八番（渡辺軍治郎君） 質疑はもっと続行したかったんですが

一応不手際のような形で討論になったんですが。

私は値上げの問題について出されている資料が、非常に料金の面では一年間の収入を資料では推定で出しているわけです。それで市長の答弁では五十年度の会計は九カ月分だ、こういうふうに言われておりますが、大体汲み取り収集量は一千八百三万七千七百二

十二トンで、五十年度の現行と変わらないわけです。だからそういう点でみても九カ月という出されてきた資料そのものがあやふやに思うわけです。そういう点でこれを見ますと、かなり資料からみて計算すれば、そう大きな赤字にはならないというふうに考えられるわけです。

というのは、減価償却費の問題は一応置くとしても、大体地方財政法の六条では公営企業の運営について出されていますが、ここでは客観的にみて不適当だというようなものは経費として除外するというふうな項があるわけです。したがって赤字であるか、黒字であるかというように計算をする場合には、こういう減価償却の経費は除いてみるのが妥当だと思えます。

また、自治省の通知を見ましても、経費の八割を収入で見込めというふうに通知があるわけです。八割でみますと八千三百三十万三千というのは五千九百八十四万五千円、こういうふうに経費がかなり減るわけです。公営企業に準じてやる公社のくみ取りの料金ですから、当然こういうものに依拠して計算するのが妥当だと思えます。

特に、まだ五十年度に入ってから二カ月ちょっとですが、まだこれからの経営状態がどういうふうになっていくかということは推定であって未定であるわけです。そういう中で五十年度を赤字が出るということは、四十九年度は一応置いたとしても、赤字の先取りというようなことで、私は五十年度にこれだけの赤字が出たからこれを市民に負担するために値上げが必要なんだということなら、市民に対する説得力はあると思えます。そうではないわけですから、要するに赤字を見込んで料金の改定、しかも出され

てきた積算資料は一応の推定をもとにして一六五%というような大幅な率の値上げになっているわけです。これは私が計算してみても大体三五%から四〇%、もっと値上げ幅は少なくみても、一応それでやってみてなお赤字が出るようだったらまた再考するということのようなことが、一応公共料金ですから市民の要望にこたえる方向だと思えます。

それを、何か質疑の中でみても、かなり了解に苦しむようなそういう資料が出されているわけです。こういう資料に基づいて大幅な値上げを認めるということは、通告質問の中でも他の議員の中から出されているように、インフレや不況が続いているという市民の生活が苦しい中で公共料金の値上げが、くみ取り料金だけではなしに手数料、使用料も上がる、保険税も上がる、水道料金の値上げも計画されている。一斉にこういうような料金が値上げされることによってますます市民生活が圧迫される、そういう点から考えればこれは非常に大きな問題であるわけです。

市長は三億五百万円の一一般会計の赤字があるから、一般会計からの寄付金なり繰出金、そういうようなことをどっちかと言えは押さえていきたいという考えがあると思えます。これは三月の議会でも三億五百万の赤字を一年間で解消するというようなことを聞いています。少なくとも三年計画なり、長期の展望に立って赤字を解消していくということでない、しわ寄せがどうしても市民にいくはずであります。だから問題にしているわけなんです。そういう点を考えまして、値上げが市民に対して大きな負担になる。そういう点からも反対せざるを得ない

わけです。

特に、不確実な資料で赤字の先取りをする。そういうことで値上げすることには大きな抵抗を感じる次第でございます。こういう観点からこのくみ取り料金の値上げにはどうしても賛成できない。

また、付け加えるならば、低所得者を対象にこういう料金はきめべきだと思ふんです。流山議員からも出されていたように、あふれるようなそういう状態になって困っている。それに対してどうするんだ。生活の苦しい人たちはこれを放って置くわけにはいかないわけです。無理しなければいけないという面があるわけです。だから少なくとも料金を大幅に値上げする場合には、こういう低所得者層に水準を合わせて値上げ幅をできるだけ低く押さえていくのが政治であろうと思うのであります。そういう点を付け加えまして私はくみ取り料金の値上げ案に反対するものであります。

〇一三番（林 豊君） 私は五十一号の議案に対して賛成の立場から討論いたします。

本議案は保全公社の理事側において十分なる検討を加えた上で妥協点を見出してきめた料金であり、私は適正な料金であると判断をいたします。

また、独立採算制、あるいは公共性というような問題から推しましたも、これはただ市街地のみに言えることでありまして、農漁村においては八五%以上のものは対象外の地帯であります。こういうものについては、まだまだ当市におきましては独立採算制をとるのが妥当であると考えられます。

また、いまの発言でも何か神経面にはかりこだわっているという面が見受けられます。実際公社が発足して以来料金が安くなつたというのが実質であります。やみ料金を出されて料金を払っているよりは料金が安くなったということが実質面でありまして、なお六五%の値上げをしてもまだ委託の時代に比べれば安いというふうに私は感じております。

以上のような理由をもちまして、この案に賛成いたします。

〇一四番（石井輝久君） 私は本案に対して賛成の討論をいたします。

ただし、過日の私の通告質問でも要望したとおり、また日程第二報告第二号の議事にあたりましても発言いたしましたとおり、今後の企業努力を重ねられたいということを条件とし、また昨日半沢市長は今後一そうの努力を重ねるとの答弁をみましたので、これを信じて賛成するものであります。

また、市民感情といたしまして、公社発足以前の民営時代の料金よりはるかに低廉であり、かつ石井衛生課長をはじめ関係者一同の市民に対するサービスに対して感謝もある現状にかんがみまして、水道料金その他の値上げと違ふものと判断いたしました。条件つきで賛成の討論をするものであります。

〇一二番（栗原一雄君） 議案第五十一号に賛成いたすものであります。

公営による料金の値上げについてはスタグフレーションといわれる今日、市民生活に及ぼす影響はきわめて大きな問題であろうと考えるわけでございます。

議題となりました料金改正に伴う条例制定については、全協及

び質疑等で了解できたのでございますが、館山市の環境保全公社事業につきましては、住民サイドに立ち極力値上げについて企業努力により抑制すべきであろうと考えます。議会に提出されました報告第一号によれば昭和四十九年九月一日より五十年三月三十一日までの短期間の資料でございますが、前期である第一期の損益計算書による純事業損失は千二百一十一万四千五百三十三円となっております。損失につきましては独立会計の原則から申し上げ当然配慮すべき措置であり、し尿収集の円滑化をはかり、市民に対します環境衛生について万全を期すために必要な措置であると判断いたしましたして賛成いたすものでございます。

〇二六番（藤田益治君） 私は本案に対して賛成する立場から討論をいたします。

少なくとも保全公社に移管されてから以前におけるもろもろの問題が解消され、精神的にも物理的な面でも大いに前進した事實は市民ひとしくこれを認めておるものと承知いたしております。したがって今回の値上げは諸問題を前向きに、さらに解消しようとする手段であると信じます。

なお、これが値上げによっても、一千余万円の損失が見込まれるものであって、清掃事業もなかなか困窮を続ける事実は見逃せないものであります。

これらの問題点を大きく解決していくのは行政の力をまたなければならぬのであって、将来一そう円滑な運営を力強く期待すると同時に、これを望んで本案に賛成をいたします。

〇議長（吉田勇治郎君） 他に討論ございませんか。――討論なしと認めます。

採 決

〇議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。本案の採決は起立により行ないます。

本案に賛成の諸君の起立を求めます。

（賛成者起立）

〇議長（吉田勇治郎君） 起立多数。よって本案は原案どおり可決されました。

議 案 の 上 程

〇議長（吉田勇治郎君） 日程第九、議案第五十二号昭和五十年年度館山市一般会計補正予算を議題といたします。

議案第五十二号 昭和五十年年度館山市一般会計補正予算（第二号）

〇議長（吉田勇治郎君） 御質疑願います。御質疑ございませんか。――御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

〇議長（吉田勇治郎君） おはかりいたします。

本案を委員会付託並びに討論を省略して、直ちに採決することにより御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

〇議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） 本案を原案どおり可決するに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって本案は原案どおり可決されました。暫時休憩いたします。

午後三時二十分 休憩
午後三時五十八分 再開

○議長（吉田勇治郎君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

議案の上程

○議長（吉田勇治郎君） 日程第十、議案第五十三号昭和五十年年度館山市国民宿舍特別会計補正予算を議題といたします。

議案第五十三号 昭和五十年年度館山市国民宿舍特別会計補正予算（第一号）

質疑応答

○議長（吉田勇治郎君） 御質疑願います。

○一八番（渡辺軍治郎君） 三人退職したということになっていますが、これはどういう事情でやめたのか。

それから臨時職員、応接員等の賃金ということで二百五十三万六千円が計上されていますが、三人退職してこれは何人なのか。

その点まずお聞きしたいと思います。

○鳩山荘支配人（野中圭太郎君） 申し上げます。

三名の退職者の理由と申しますと、一名は厨房の調理助手でございまして、自分の息子の嫁さんが亡くなった関係で、子供の面倒をみなくちやならないという関係でやめたんです。

あと二人は応接員で、結婚のために退職しました。

それから、賃金の二百五十三万六千円でございますが、これは四月、五月、六月に各一名ずつを臨時に採用いたしまして、当初予算に盛られました不足分を計上したものでございます。

○一八番（渡辺軍治郎君） 三人退職して、臨時で一名ずつということで、これは鳩山荘を利用するそういう人たちのサービスとの関係があると思うんです。三人やめて、あと臨時ということではたしてサービスがうまくいくのかどうか。

また、残っている人たちへの労働強化、そういうようなことで仕事がいまいくのかどうか、そのへんの考えはどうか。

○鳩山荘支配人（野中圭太郎君） 申し上げます。

四十九年度中は私以下十四名でございました。それで五十年に入りました、現在でも私以下十四名でやっておりますけれども四十九年度の実績からみまして臨時職員三名でもやっていける自信がございます。

○議長（吉田勇治郎君） 他に御質疑ございませんか。――御質疑なしと認めます。

委員会付託の省略

○議長（吉田勇治郎君） おぼかりいたします。

本案を委員会付託並びに討論を省略して、直ちに採決することにより御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって決しました。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） 採決いたします。

本案を原案どおり可決するに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって本案は原案どおり可決されました。

日 程 の 追 加

○議長（吉田勇治郎君） おはかりいたします。

ただいま市長から議案第五十四号館山市教育委員会委員の任命についての件が提出されました。

この際これを日程に追加し、議題といたしたいと思います。これに御異議ありませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よってこの際議案第五十四号館山市教育委員会委員任命についての件を日程に追加し、議題とすることに決しました。

議 案 の 配 付

○議長（吉田勇治郎君） 議案を配付いたさせます。

議案の配付漏れはありませんか。— 配付漏れなしと認めます。

議 案 の 上 程

○議長（吉田勇治郎君） 議案第五十四号館山市教育委員会委員の

任命についてを議題といたします。

議案の朗読を願います。

（書記朗読）

議案第五十四号 館山市教育委員会委員の任命について

議 案 の 内 容 説 明

○議長（吉田勇治郎君） 議案の説明を求めます。

（市長半沢良一君登壇）

○市長（半沢良一君） 御説明申し上げます。

ただいま御提案いたしました議案第五十四号につきましては、現在教育委員会委員中一名が欠員となっておりまして、その後任といたしまして古官幸八郎君が最も適任と考え、任命いたしましたので、是非とも議会の御賛同を賜りますようお願いいたします。以上説明を終わります。

○議長（吉田勇治郎君） 説明は終わりました。

御質疑願います。御質疑ございませんか。— 御質疑なしと認めます。

委 員 会 付 託 の 省 略

○議長（吉田勇治郎君） おはかりいたします。

本案については委員会の付託を省略いたしたいと思います。これに御異議ありませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって委員会付託は省略することに決しました。

討 論

○議長（吉田勇治郎君） 討論に入ります。

○一八番（渡辺軍治郎君） 私は、市長さんの説明で適任であるからということを出されましたけれども、私自身は古宮さんはどういふ人か知りません。しかし、先ほどお聞きしたら名誉市民の推薦に入っておられたと聞いております。

私は名誉市民というような、形式的なそういうことを館山でやる必要があるかどうかということでは反対いたしました。そういう立場からいたしましたして一応私は問題があると思います。

私も共産党としては、教育委員会というものは教育上非常に重要な委員会でありますので、この委員は公選制によって選出すべきだということで、これは私どもの政策として出しておりますので、そういう立場からこの認定には承認しがたいということではあります。

○議長（吉田勇治郎君） 他に討論ございませんか。——討論なしと認めます。よって討論を終ります。

採 決

○議長（吉田勇治郎君） これより採決いたします。本案に対する採決は起立により行ないます。

教育委員会委員任命について同意を求める件は、これに同意することに賛成の諸君の起立を求めます。

（賛成者起立）

○議長（吉田勇治郎君） 起立多数。よって教育委員会任命について

同意を求める件は、これに同意することに決しました。

閉 会 午後四時八分開会

○議長（吉田勇治郎君） おはかりいたします。

本定例会に付議されました案件は全て議了されました。よって会議規則第七条の規定により、本日をもって第二回市議定会定例会を閉会いたしますことに御異議ございませんか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

○議長（吉田勇治郎君） 御異議なしと認めます。よって本定例会はこれにて閉会することに決定いたしました。

○本日の会議に付した事件

一、報告第一号乃至報告第三号

一、議案第四十七号乃至議案第五十三号

一、発言の取り消し

一、日程追加・議案第五十四号

地方自治法第二百三十三条第二項の規定により署名する。

館山市議会議長

館山市議會議員

館山市議會議員

吉田勇治郎
押 元 総
遠 山 子

